過ぎし戰の價値を論ず

日本勞働總同盟神戸聯合會
今吉無國

過去は總て歴史の中に生く、過ぎし戰ひの價値は、やがて來る可き戰の野に於て、活き、動き、高鳴る、勝利は歴史に忠實にして、而も、創意の念に富む者にのみ與へらる。

「歴史は繰返へす」と奈翁は言つた、この心意は、歴史は重要なものであると言ふ事を敎へた所にある、單に繰返へさる可きものは、歴史であると言ふ感念のみに、人が活動して行く時は何うか？　勞農ロシヤ、社會主義聯邦、産業共和國は、此の世に生れ出てゐない筈である、然し未だ過去の歴史が持ち得ぬ無産者國家の嚴然たる存在は、人類が爲し得たもつとも大なる建設で、そこには、人類が深く秘めて、容易に失はぬ創意の巨大な力が鮮かに見へる。

神戸機械工組合第一部（當時東神鐵工組合）が此の度爭議記念に最も有益なる且又最も面白き勞働爭議の歴史的償値ある小冊子を刊行さるゝに際し、平素自分が歴史に對する卑見を述べて今後の階級戰に奮闘さるゝ諸君の御參考に供した次第である。

大正十二年八月中旬

1、第三工場の爭議

時は大正十一年七、八の兩月に渉つて、吾が神戸の地に、日本勞働運動史上、一大ショックを與へた、彼の川崎三菱三萬五千の兄弟が、惡戰苦闘の大爭議こそは、吾が國、全勞働者階級の、浮沈の關ケ原であつた。此の秋我々神戸製鋼所第三工場の勞働者も、何うして之を、默視する事が出來よう？、無産階級解放戰に於て、神戸三大工場の一たる、神戸製鋼所勞働者の、奮起すると否とは、實に此の大爭議勝敗の境目なのだ。吾々は「裏切者」の神戸製鋼所職工よとの、いまはしい名を、殘すに忍びなかつた。我等は、何物をも、怖るゝことなく製鋼所全勞働者の大奮起を呼び以て、此の歴史的大爭議の必勝を期したいとの、心念の下に七月十三日第三工場の兄弟、二百餘名は、會社に向つて、勞働組合加入する自由、工場委員制度の實施、解雇手當及び退職手當の制定、日給の增額等の要求を提げて正午會社に交渉した。こゝに於て會社は要求を拒絶すると同時に、其の日、午後二時より向ふ三日間、臨時休業を發表して、吾等が團結に備へた。吾が爭議團員一同は表門より退場して、原田村青年會館に本部に引上げた。かくて十六日、阿彌陀寺に於て、鎌造工組合の發會式を擧げ、越えて十九日には現代思想界の大偉人、ラッセル氏を、メリケン波止場に迎へた、氏は上陸早々少しの愬ふ間もなく、我等の演說會で、一場の激昂演說をされた（賀川氏通譯）さらでだに猛烈な團員の意氣もこゝに於て益々隆り、結束愈々固くなつた、俄然魔の手は伸びて、最高幹部の高岡氏を始め、外數名の者は、檢束された、然しながら、爭議團の結束は、少しも亂れず、行商に、運動會に登山にと固め居たが、無念や、川崎三菱爭議團、慘敗の宣言は、その餘波を吾等にも來し、一時鉾を收めて、出業の止むなきに至つた。此の爭議に於て、高岡、

大獄、河野の三氏は、犧牲者となつて、檢事局送りとなつた、その高岡氏は、治安警察法に依り、二ヶ月に處せられたが、執行猶豫となつた。幸か不幸？

嗚呼悲風慘雨の當年を思ふとき、吾が腕は鳴り、眼には、無念の涙止まず。

2、悲壯なる犧牲者の遺書

心ある者は、神戸製鋼所の生んだ上谷清逸君（元第六工場在職）を追憶せよ、彼れは全く階級戰線の名譽ある戰死者である。社會は之等の尊き犧牲に依りてのみ淨化されるのである而かも彼れが死に臨んで尙資本家の横暴を鳴らし勞働者の結束を說いた。吾等が彼れの遺書を見る時血湧き肉躍ると共に、而も涙の止め難きものがある。我等は彼れの死を弔ふて立ち止めて近ける同志の意志を貫徹すべく用意合戰をしなければならぬ、そして彼れの死をして虛義なきものたらしめてはならぬ、

揭げる、之れを讀んで悲憤の拳を握らざるものは我々の敵である。

上谷　清逸

『諸君よ、私は知らずに貰らつた金のために主義を賣り、友を賣り、理想までも屈げなければならなくされた、私の立場悲觀して又今の場合のがれる道もなく、私は死を選びます、指の負傷手當金だと思ふたのが私を買收する爲めの金であつたのです、其の金は全部使つたのです、返へすにも返へされないのです、死に面して諸君に御願ひする事は私の死に依つて諸君は何等かのヒントを得て益々結束を强うして横暴なる資本家を倒す迄戰はれん事を吳れ〳〵も諸君に御願ひする次第であります』友愛會神戸聯合會樓上にて（賀川豊三郎の大勞働爭議の際に於て△△の狂及に作れた「常峰俊」君の遺書を掲ぐ